

# 日本仏教と福祉思想

## — 鎌倉仏教を中心に —

麴町学園女子高等学校 小泉博明

### 1. はじめに

少子高齢社会や死を看取る終末医療、増加する少年犯罪やボランティアへの参加などの現代の諸課題について考え、新たな福祉社会の実現をはかるためには、仏教における福祉思想を見直し、新たに学ぶべき視点がないだろうか。そして、この混迷の時代に、「競争」から「共生・共存」と叫ばれるなか、仏教の福祉思想から、一人ひとりが慈悲の心をどのように生かすかを考えることにする。

慈悲とは、仏教における福祉思想の根底をなすものであり、仏陀の「あたかも、母が己が独り子を命を賭けても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の（慈しみの）ところを起すべし。」（『スッタニパータ』）は、あまりにも有名なことばである。「慈心与楽」「悲心拔苦」であり、「慈」とは、いつくしみを意味する友愛を、「悲」とは他者の苦に同情し、苦を取り除くことである。慈・悲に、喜・捨を加えて、四無量心という。「喜」とは随喜で、他者がよいことをすれば、わがことのように喜ぶことで、「捨」とは好き嫌いで差別しない平和な心をいう。また、布施・愛語・利行・同事を四摂事（法）<sup>ししょう</sup>という。愛語は、「和顔愛語」の四字熟語として使われる。同事とは、他者との協力のことである。

大乘仏教になると、慈悲とは、利他行であり、菩薩行として重視された。菩薩行の自利利他は、自他の対立ではなく、他によって自己を否定し、そして自己を生かすということである。他者と共に喜び、他者の苦を共有し、共感するものである。また、六波羅蜜では、まず第一に布施が挙げられている。布施には、衣食などを与える財施、教えを与える法施、恐れを取り除く無畏施がある。例えば、『ジャータカ』（『本生譚』）を素材にした、法隆寺玉虫厨子須弥座絵の捨身飼虎図も他者を救うために、わが身を捨てて布施することを示したものである。

また、仏教には福田思想がある。善き種子を蒔いて、功德の収穫を得る田地の意味である。仏陀の「この生ある者どもの世において、施与を受けるべき人々に与えたならば、大いなる果報をもたらす。良い田畑にまかれた種子のようなものであると言われている。」

（『ブッダ神々との対話』）の考えである。布施の対象を田にたとえたもので、敬田・恩田・悲田の三福田がある。この福田思想にもとづき、光明皇后は、貧窮者や孤児の救済施

設として、悲田院を造ったのである。

ここでは、仏教の福祉思想に関連の深い事項の主なものだけを列挙したが、仏教の不殺生（アヒンサー）や非暴力は福祉社会の前提であり、ガンジーやタゴールのみならず、キング牧師などにも影響を与えているのである。また、インドのベンガル出身で、ノーベル経済学賞を受賞したアマーティア＝センのいう平等や公正も、仏教の寛容や共存に、その原理を見出すことができるであろう。

## 2. 古代仏教と福祉思想

聖徳太子の福祉思想の中心は『三経義疏』に展開されているという。『三経義疏』とは、言うまでもなく大乘經典の『勝鬘經』『法華經』『維摩經』の注釈書である。『勝鬘經』は、在家女性信者の勝鬘夫人が、仏陀の前で成仏の可能性をさぐる内容である。また、『維摩經』は維摩居士が在俗にありながら、仏土は衆生に即して存するを説く内容であり、「一切衆生病むをもって、このゆえに我病む」の言葉も有名である。

古代仏教は律令制による国家仏教である。よって、仏教の福祉思想も国家が背景となり、個人の自発的信仰に基づくものが中心ではない。奈良仏教では、例えば、光明皇后の悲田院や施薬院は、皇后宮職に置かれた公的機関であった。このような状況で、行基の福祉活動は顕著であり、当時の「僧尼令」が僧侶と民衆の接触を遮断するなかで、村落の荒廃の救済や、人民の生活向上をはかった。とくに、農業生産のための灌漑、交通の整備や、運脚夫や役夫のための布施屋の設置などが挙げられる。その後の、行基から空也、そして一遍へと続く福祉の先駆者である。

平安仏教になると、最澄は「一切衆生悉有仏性」の平等観に立脚し、「天台法華宗年分学生式」（『日本思想体系4』岩波書店）で、「国宝とは何物ぞ。宝とは道心なり。道心ある人を名づけて国宝となす。」という。すなわち「国の宝」とは、国家的見地から道心を持ち、「一隅を照らす」人で、学問実践に優れ、自分を忘れ他人を利するという慈悲の頂点とする大乘の菩薩行なのである。

空海は、満濃池をはじめとする灌漑、その他の工事を行った。また庶民教育のために綜芸種智院の創設がある。その目的は、儒仏道三教を学ぶ学校を建て、衆生を済度しようとしたものである。

平安後期になると、律令制が衰退し、地方豪族名主層の台頭、平将門や藤原純友などの戦乱、さらに飢饉・災害・干魃・洪水・地震・流行病などが続き、まさに末法の世ともいふべき状況であった。律令制の僧尼令による仏教が破綻し、貴族的な仏教では、この社会不安を払拭することはできない。そこに、聖ひじりである空也が登場したのである。市井で、口に念仏を称え（口称念仏）ながら遊行し、菩薩行を実践し、その功德により天災や疫病

などの鎮圧を祈念するものであった。空也における阿弥陀仏は、わが身に代わり苦患を受ける仏であり、罪障消滅の機能があったといわれている。

### 3. 鎌倉仏教と福祉思想

鎌倉仏教の祖師である、親鸞、道元、日蓮、一遍における福祉思想と、旧仏教といわれる俊乗房重源、明恵高弁、叡尊、忍性などの福祉思想について鳥瞰し、その指導展開事例を提示することにする。

#### 学習のねらい

- (1) 鎌倉仏教の祖師といわれる、親鸞、道元、日蓮を仏教福祉の視点より取り上げ、鎌倉仏教の理解をより深める。とくに、吉田久一・長谷川匡俊『日本仏教福祉思想史』を参考に、平易かつ簡潔に鎌倉仏教の福祉思想を説明する。
- (2) 行基、空也そして一遍へとつながる遊行僧から、民衆への福祉思想を探り、大乘仏教の菩薩行について考える。
- (3) 忍性や一遍のハンセン病者への救済活動から、病者への差別や排除をどのように克服するかを学ぶ。

#### 学習活動・指導展開

(導入) 『一遍聖絵』の「兵庫の海岸の結縁衆の入水」の絵を見せ、合掌し海に入水している人物について問う。一遍は、誰にでも信・不信をえらばず、浄・不浄をえらばず、念仏札を配っていた。その一遍が死んだ後を追って入水したハンセン病者を描いたのが、この絵である。

(展開)

現代的な意味での福祉思想ではなく、広く仏教の根本にある「慈悲」という観点から、鎌倉仏教の代表的な3人を挙げる。

#### ○親鸞の福祉思想

親鸞の慈悲に関する思想をみてみよう。まず、慈悲について、次のように語る。

「慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。また浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとをし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏まうすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと云々。」(『歎異抄』第四条)

梅原猛は、「親鸞は聖道門の慈悲は、結局首尾一貫しない慈悲ではないか、おまえはたった一人の人間でも十分救うことができるというのか。親鸞は一刀のもとに聖道門の慈悲

を斬り捨てる。親鸞は結局聖道門の慈悲を有限者の立場に立つ慈悲だというのであろう。もっとはっきりいえば、それは有限なる慈悲を無限であるかのごとく思い誤った慈悲だというのであろう。」(『歎異抄』講談社文庫・解説) という。

「親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏まふしたることいまださふらはず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。」(同上・第五条) ともいう。これは、慈悲とは言うまでもなく自己中心ではなく、他者との共同の思想であるからである。

さらに、「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ」(同上・第六条) という。これは、念仏共同体を主張しているが、「同朋同行」により、同じ信者の垂直関係ではなく、人間同士の平等的な水平関係によって、共同連帯関係が展開されるのである。『正像末和讃』には、「恩徳讃」として歌われる、「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし。師主知識の恩徳も、骨を砕きても謝すべし」とある。

#### ○道元の福祉思想

道元にとっては、自利と利他は相即関係であり、別々のものではない。社会福祉とは、その目的のためにするのではなく、社会福祉も仏法の現成にほかならない。道元はひたすら坐禅をすることにより、仏法に自己放下すれば、我執を離れ、仏の悟りの境地と一つになるとする修証一等を説いた。生死しやうじに執着することがなく、念慮知見をはなれ、憂い厭う心なく、慈悲に生きる者は、すでに仏といえるのであり、仏になることは決して難しいことではない(『正法眼蔵』生死)と説く。捨身の行としての坐禅は、私心をはなれ、慈悲の心を備えると説いた。

捨身供養は、古くから仏教福祉の動機として重視されたが、道元は家族血縁のためではなく、名聞を得るためでもなく、また現世利益や小徳小知から発したのものではない。諸仏慈悲という仏道修行のためであるとする。

#### ○日蓮の福祉思想

日蓮は『法華経』に「慈悲の極限」を見出し、『法華経』を末法の世において、最下級の衆生を救済する最上の教えであるとした。『法華経』の「譬喩品ひゆほん」には「われは、衆生の父なれば、応にその苦難を抜き、無量無辺の仏の智慧の樂を与え、それに遊戯せしむべし」とある。また、法華経の行者となった日蓮は「我日本国の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等とちかいし願、やぶるべからず」(『開目抄』)と誓願をたてている。

(まとめ)

鎌倉仏教を代表する、親鸞・道元・日蓮の福祉思想についてまとめる。また、捨聖とも言われた一遍が、共同体からの排除を余儀なくされた鎌倉期の非人(乞食)、ハンセン病患者などの差別的貧困層の救済に尽力したことに関連し、鎌倉旧仏教といわれる僧侶の活動

についても言及する。旧仏教については、「倫理」では、ほとんど取り扱われていないが、福祉思想の観点からも、その紹介が必要であると思われる。

叡尊の弟子である忍性は、戒律を守り、鎌倉極楽寺や奈良の北山十八間戸などで福祉活動を行ったことは著名である。

#### 4. まとめ

仏教の福祉を考えるに、慈悲と縁起がキーワードとなっている。慈悲とは、自他の対立を超えたもので、他者を愛することにより、真実の自己が輝くのである。また、縁起とは「これあればかれあり、これ生ずればかれ生ず」というように、すべてのものは相互に依存しあっているということである。これは、現代的に言えば「共生」に相通ずるものである。当然ながら、人権、人格、自立を前提した上での共生でなければならない。共生とは「自他が融合する〈共同体〉への回帰願望ではなく、他者たる存在との対立緊張を引き受けつつ、そこから豊かな関係を創出しようとする営為」(『岩波哲学・思想事典』)でなければならない。

現代では、効率や利便性のみを追求し、共同性が壊れつつあることは、随所で指摘され、その反省が行われている。東西冷戦後に、市場原理によるグローバリゼーションが世界を席卷し、宗教や民族による対立も跡を絶たない。どのように解決をはかっていけばよいのだろうか。このような状況下で、公民科「倫理」の日本思想のなかで、仏教の福祉思想に言及することは、極めて肝要なことであろう。今後の、より効果的な実践に向け、精進することを願いつつ、擱筆する。

#### 主要参考文献

吉田久一・長谷川匡俊『日本仏教福祉思想史』法蔵館，2001年

池田英俊・芹川博通・長谷川匡俊編『日本仏教福祉概論』雄山閣出版，1999年

古田紹欽監修『現代日本と仏教 IV福祉と仏教』平凡社，2000年

吉田久一・岡田英己子『社会福祉思想史入門』勁草書房，2000年

水田幸正『仏教・共生・福祉』思文閣出版，1999年